2012年
6月5日
火曜日

学生の〝基本〟
―大学で学ぶことの意義―

土井教之　教授（産業組織論）

最近注目されている曾野綾子著『人間の基本』（新潮新書、2012）に関連して、「学生の基本」について考えます。学生の基本は学ぶことです。近年の社会や経済の停滞に直面して、教育、あるいは広く学ぶことの意義が問い直されていることからも重要な問題です。

例えば、最近学生のインターンシップが「就職に役に立つ」として注目されている。しかし、日本のインターンシップには違和感をもちます。インターンシップが「目的化」してしまっているからです。「面接での話題作り」のように見えます。今の就職事情が許さないのかもしれないが、一考の余地がある。事実、今の就職面接は、「作られた話題」が中心で、その話から本当の学生評価になっていないのでは、という懸念が企業の方でも出ているらしい。インターンシップがよくないと言っているわけではなく、教育上の有効性は認めますし、外国でも重視されている。そのさい、一つの科目として単位認定されることが重要ではなく、大学での勉学にその成果を生かすことが強調される。

ところで、学生の本分は「学ぶこと」です。インターンシップが本来学生諸君の本分である研究にどのように生かされたかをよく考えて、そしてその結果を基に、大学で何を学んだかを、面接担当者に伝えるのが望ましいのではないか。インターンシップは研究の一つの過程・手段である。こうしたインターンシップと研究の相互作用から、学生にとって重要である「悟性」（理解力、要領）と「感性」（問題意識、判断力）が養われるのです。特に感性が重要です。それが養われると、問題を究明したいという思いが生まれ、「挑戦」、「革新」の能動的、前向きの精神がでてきます。それがないと、語呂合わせ風に言えば「惰性」の世界となる。

それでは、学ぶ、あるいは学問するとは一体何か。最近、科学の世界で、これまでの常識を覆すような議論が出されている。例えば、アインシュタインの相対性原理とは異なる実験結果が話題になった。文系の人間からすれば、科学の世界ではただ一つの理論、真理があるようにも思うのですが、どうもそうでもないらしい。ましてや、社会科学では、一つの事象に複数の理解・理論がある。例えば、なぜ日本経済は低迷から抜け出せないのか。ある政策は効果を示さないのか。これらの問題にはいくつかの説明が出されている。この問題に取り組むためには、そうした多様な議論を理解し、それを基に自己の意見を組み立てなければならない。先に取り上げたインターンシップでの経験からそのヒントが得られるかもしれない。そのレッスンを研究の中で生かすことが重要です。

従って、多様な議論を理解し、それに基づいて議論することは、要は、我々が「心の余裕」をもつことにつながる。心の余裕は人生にとって不可欠です。例えば、「すぐキレる」、あるいは「社会性が欠如している」のは心の余裕のないことを反映している。大学で学ぶことは確実に心の余裕を生む。

最後にあらためて、「学ぶことを通して感性を身につけ、心の余裕をもつ」ように心がけてほしい。■